

近現代フィリピンにおける民族衣装をまとった
聖母像の研究

古沢 ゆりあ

博士（文学）

総合研究大学院大学
文化科学研究科
比較文化学専攻

平成29（2017）年度

博士論文の要約

博士論文題目：近現代フィリピンにおける民族衣装をまとった聖母像の研究

著者：古沢ゆりあ

本論文は、アジアにおける西洋キリスト教図像の受容・変容と、視覚イメージにおける民族アイデンティティ表象の観点から、近現代フィリピンにおける「民族衣装をまとった聖母」像について論じるものである。20世紀以降アジア各地において同時多発的に創出された、民族衣装をまとった現地の女性の容貌をした聖母の絵画や彫刻のフィリピンにおける事例に焦点を当て、その成立の背景と受容のあり方を、美術史的、文化人類学的手法により明らかにする。

本研究の主眼は、新たな聖母像がいかに形成されるかを通して、イメージ（像）を生み出しそのイメージと関係を結ぶ人間のあり方を描き出すこと、イメージが生み出され受容される過程における「自己へのまなざし」と「他者からのまなざし」の関係性に着目し、文化における包摂と異化の作用の観点から論じることである。民族衣装をまとった聖母の図像が、20世紀初めから現代までの各時期に異なる背景の中でどのように生み出され受容されてきたか、そこに人々が何を投影し読みとっているかを解明し、グローバル化とそれに伴うローカル化の進行する時代においてそれらを生み出し受容する人々のアイデンティティの変化とその社会的、文化的、歴史的な文脈を考察する。

研究方法は、歴史文献資料調査（日本、フィリピン、アメリカ合衆国）とフィリピンでのフィールドワークによるものである。

論文の構成は次の通りである。

序章「民族衣装をまとった聖母 ―包摂と異化の視覚表象」では、聖母像の現地化をめぐる背景を概観した。まず、キリスト教美術における聖画像の誕生と発展の歴史のなかでは、西洋において最初の「現地化」が起こり、それが世界各地へ広められることで規範としての力を持つと同時にその土地ごとの変容をとげていったことを確認した。そのなかで、マリア観音に代表されるような近代以前の現地化と、本論文で取り上げる近代以降の現地化との違いとして、自らの文化を客体化しその文化を表現すると思われるものを聖母像に付与するということが近代以降の事例には顕著にみられるようになることを指摘した。文化の客体化は、近代国家の成立のなかで「民族衣装」が創出されていったこととも呼応する。中国、日本、ベトナムなどのアジアでの聖母像の現地化の事例のいくつかをみると、西洋人宣教師など外部の者たちの介入が現地化の推進に大きくかかわっていたことが確認できる。例えば、1920～30年代から西洋の一部の宣教師たちの間でアジアやアフリカでの「宣教美術」や「土着化キリスト教美術」をめぐる議論が盛んになり、現地で制作が奨励されたり、博覧会や出版物により作品が西洋へ紹介されたりした。このように現地の動きと国際的な動向の相互関係のなかで、各地で現地の衣装をまとった聖母像が創出されたので

ある。

第一章「フィリピンにおける聖母崇敬の歴史と図像 —マゼラン上陸からエドサ革命まで」では、植民地時代にスペインによって導入された聖母崇敬と聖母像がいかに定着し現在に至るかをたどった。まず、歴史記録から植民地時代における聖母像の受容をたどり、近現代においてもエドサ（ピープルパワー）革命においてマルコス退陣をせまった民衆のデモのなかに聖母像が掲げられた例など政治的な文脈とも結びついていることを述べた。次に、現代の信者の人々の聖母崇敬の実践のなかの聖母像の役割をみた。その特徴として、さまざまな名前で呼ばれる複数の聖母像が崇敬を集めていること、有名な像は多くの複製が作られそれぞれ崇敬対象となること、祈るときに像に手を触れるという行為が重要であること、聖母巡行祭や聖母像展示会のような行事が行われることなどを紹介した。植民地時代に導入された図像だけでなく、現在に至るまで新たな像が導入されたり創出されたりしており、民族衣装の聖母像の誕生の背景として、このような聖母像の歴史や信仰実践があることが確認された。

第二章「バリタワックの聖母 —革命とフィリピン独立教会」では、フィリピンで最初の現地の衣装をまとった聖母像とされるバリタワックの聖母についてとりあげ、アメリカ支配下時代のフィリピンの民族主義とキリスト教を背景としたシンボルの操作と新たな表象の生成を、歴史資料から明らかにした。バリタワックの聖母を有するフィリピン独立教会は、独立革命を背景に教会のフィリピン化を求めて1902年にローマ・カトリックから分離独立した。この聖母像は、フィリピンの衣装をまとい、革命のとき革命の闘士の夢に現れたという由来譚をもつ。この章では、先行研究で未だ指摘されていない次の二点、つまり、バリタワックの聖母の伝説と図像が成立した時期を探り、「母なる祖国」の寓意像（擬人像）としての解釈を提示した。確認できた限り、バリタワックの聖母が資料上最初に登場するのは、1924年9月28日にマリア・クララ教会の落成式に際して像が安置され、初代最高司教グレゴリオ・アグリパイの演説の中で言及されたときである。その他の資料も照らし合わせ、図像は1924年までに成立し、民族主義の知識人であったイサベロ・デロスレイエスはその考案者であったと考えられる。次に、バリタワックの聖母がアグリパイの演説と『祖国のノベナ』において「母なる祖国」の像であると言われていることを踏まえ、図像学における「国」の寓意像（擬人像）としての女性像の観点から考察することで、バリタワックの聖母もこうした図像学の系譜に位置付けることができると考えた。さらに、バリタワックの聖母が、「偶像」ではなく「象徴」であるとされていること、フィリピンの衣装をまとい独立革命に関連する物語をもつことには、フィリピン独立教会の合理主義的・民族主義的思想が表れていることが指摘できる。

第三章「ガロ・B・オカンポ作《褐色の聖母》（1938年）—初期の来歴と加筆の可能性」は、フィリピン近代美術の代表的画家ガロ・B・オカンポによって1938年に描かれた油彩画作品《褐色の聖母》をとりあげ、フィリピンにおける近代美術運動と、その中で画家が聖母子像という西洋美術由来の主題を再解釈して作品化し、現地の美術界に一定の影響を

与えたことを考察するものである。この絵画は、アメリカの支配下のフィリピンで独立準備政府が樹立されたコモンウェルス時代に描かれ、文化的アイデンティティの形成にとまなう自己（自文化）像の表現がみてとれる。この章では、この作品をめぐって次のふたつの新しい観点を提示した。それは、作品の評価と受容の初期の過程には外部からのまなざしの介入が見られることと、制作後一～二年のうちに作品に変更が加えられた可能性である。《褐色の聖母》は、1938年4月～5月にルソン島北部の都市バギオでの展覧会で最初に展示された。聖母子をフィリピン人の姿でフィリピンの風景の中に描くという非正統的な方法で描いているため当初は批判を受け論争が起きたが、ひとりの宣教師が称賛したことにより評価は好転し、作品は有名になっていった。さらにその後数年間のうちに海外でも数回にわたって展示されるなどしたことにより、オカンポの代表作でありフィリピン美術史の重要作品とみなされるようになった。なお、1938年から1940年までの出版物に現れる本作品の写真と現存作品とでは、背景を中心とした細部が異なる。そのことについてこれまでの研究で言及はないが、両者の画像の比較と現存作品の表面の観察から、作品が制作後一～二年のうちに、おそらくは加筆がなされることによって変更が加えられた可能性が考えられる。そして、その変更の要因となったのは、外部からのまなざしの介入も含む作品評価だったのではないかとの見解を提示した。

第四章「バランガイの聖母 — 信仰刷新運動、民衆的信心、奇跡譚」が対象とするバランガイの聖母は、1950年代にビサヤ地方のネグロス島シライ市で信仰刷新運動バランガイ・サン・ビルヘンの守護聖人として誕生した聖母の聖画である。この聖画は、バランガイ・サン・ビルヘンの創設者アントニオ・ガストンの着想と依頼によって、パナイ島イロイロのハンセン病療養所の入所者の画家によって描かれた。ビサヤ地方とされる海岸の風景を背景に、パタジョンと呼ばれる衣装を身に着けた聖母がロザリオを持った幼子イエスを抱いている。この章では、聖画が現在安置されている聖堂のあるシライ市でのフィールドワークを通して、バランガイ・サン・ビルヘンのメンバーの人々の間でこの聖母が崇敬されているさまを記述した。例えば、聖画像の訪問という行事では、聖画像を各地区に運んで、集った人々に聖母崇敬を広め信仰教育を行なう。また、バランガイの聖母に関する奇跡譚も多く語られており、病気やけがの治癒などのほか、聖画像をめぐって不思議な出来事がおこった話もある。なお、現地化された聖母像であるバランガイの聖母を崇敬する人々は、従来 of 西洋式の聖母像にも同様に崇敬を捧げており、両者は対立するものではないことは着目される。ひとりの同一の聖母が異なる姿をとって現われると解釈されているためである。以上から、現地の衣装をまとった女性として描かれた聖母が、民族アイデンティティという近代国家的な言説との結びつきを超えて、ローカルな民衆的信心の文脈で受容される様子を、宗教実践における信徒の人々と聖画像との関わりや奇跡譚を通してとらえた。

第五章「新たに生み出される現地の聖母 — 「フィリピンの聖母」と「フィリピンのマドンナ」」では、現地化した聖母像の近年の事例に着目して次のようなことが明らかになっ

た。「巡礼者」と名乗るある信徒がキリストのお告げを受けて着想して画家に描かせた「フィリピンの聖母」は、フィリピン社会の刷新への願いが込められている。また、ギマラス島のトラピスト修道院のシンコ神父が着想し島の先住民の職人に作らせた「フィリピンの聖母」の彫像は、先住民の姿をしており、「フィリピンの母親」にふさわしい姿を表しているという。さらに、マニラのパウロ会修道院のアート・ディレクターであるタンギ神父が描いている油彩画「フィリピンのマドンナ」シリーズでは、作者自らの母親の姿が投影されていると同時に献身的な無償の愛の与え手というフィリピンの母親の理想像を表してもいる。これらの聖母像は、着想者の個人的な経験や思いに基づいていると同時に、フィリピンという国とその国民の守護、また理想の母親像というように、「国」や「母」というより大きな対象にも結び付いている。衣装や姿の現地化は、そのことを視覚化しているのである。

結論は次のとおりである。

まず、フィリピンでは16世紀以降、スペインによる植民地化の過程でキリスト教とその美術が導入されたが、民族衣装をまとう形で現地化された聖母像の事例は20世紀初頭以降に登場することである。本論文の第二～四章でそれぞれ論じた民族衣装をまとう聖母像の三例が創出されたのは、1920～50年代という、フィリピンの歴史と社会に大きな変動があった時期に集中しており、各時期の歴史的事象と結びついて登場している。そこには、独立革命の挫折後、アメリカ支配下での近代ナショナリズムの勃興、また戦後の独立を経ての近代国家形成にともなう国民のアイデンティティ形成が要因として指摘できる。

つまり、西洋キリスト美術由来の聖母像が、民族衣装というフィリピン現地の文化的表象をまとうようになる現象は、外部から閉ざされることによる土着化ではなく、逆に外部との密な相互交渉の中で、他者からのまなざしを受けて自文化を客体化することで起こったものである。そもそも、近代国家における「民族衣装」というもの自体が、その土地の衣服をもとに、国の「伝統」や「文化」の真正性を象徴するものとして再創出されたものである。そして、「母なる祖国」の象徴である民族衣装をまとう女性の像が、人々を統合するシンボルとして聖母像に投影され融合するに至ったのである。

一方で、上述のような近代ナショナリズムや近代美術の登場といった大きな流れとは別に、ローカルな民衆の信仰の文脈に置かれたとき、民族衣装をまとう聖母像は民族アイデンティティの表象を離れて、奇跡を起こす守護者として崇敬を集めるようになる。このように、異なる社会階層における多様な受容のあり方が明らかになった。

研究の意義は、まず、フィリピン研究・フィリピン美術研究において、近現代における聖母像の現地化に特化した先行研究がほぼない中で、本研究はパイオニアの性格をもつものである。これまで、フィリピンの聖画像という研究対象は、美術史学における図像学的研究と、文化人類学における民衆カトリシズム研究に分かれていたが、本研究は聖母崇敬におけるイメージという観点から、それらを横断して論じ双方を結合する新たな視座を導入した。

さらに本研究の特徴は、「イメージ人類学」など近年のイメージ論の動向をふまえ、従来の美術史と文化人類学の領域にまたがる広い「イメージ」を論じたことである。先行研究の蓄積の少ない個々の具体例に即して、歴史的な一次資料やフィールドワークによる民族誌的データを用いて詳しく検討した。また、先行研究で取り組まれてきた宗教美術の東西比較とはまた異なる観点、すなわち植民地から植民地後近代社会における文化の変容の諸相を明らかにすべく、重層的な文化を持つフィリピンにおけるキリスト教図像を論じた。

以上のことから、近現代フィリピンにおける民族衣装をまとった聖母像を通して、近代化の中で創出される自文化のアイデンティティとそこに表れる外部との力関係、そしてそれを受け入れあるいは超えていこうとする人々の実践が見えてきた。これは、グローバル化による人と文化の越境とその結果として融合／対立が加速する現代の社会を考える上で示唆に富む参照事例となろう。